

大学コンソーシアム京都
インターンシップ・プログラム
「長期プロジェクトコース」
「京都北部の観光振興企画・提案 project」
活動報告書

2021年11月11日

一般社団法人 KOKIN インターンシップ生

大谷楓 中西百香 中野慎一郎 日高燈志

1、プロジェクト概要

舞鶴で地域資源を生かしたまちづくりを進める「一般社団法人 KOKIN（以下「KOKIN」と表記）」の皆様とともに、「京都一、チャンスのあるまち」を実現するため、ビジネス機会の企画提案やイベント企画を行う。今回は「観光振興」にフォーカスし、提案型、かつインターンシップ生の能動的なチャレンジのもと行う。

2、当初の現状

今回の受け入れ先である KOKIN の 6 月当初の現状としては、以下の 3 点が主として挙げられる。

- ① 観光客及び宿泊客の減少
- ② 新しいアイデアを求める声
- ③ 新型コロナウイルス流行との共存

以上 3 点は相互に関連しており、それらを順に説明する。

世界的に流行している感染症：COVID-19 の影響により、従来「当たり前」「自由」とされてきた人々の流動に大きな制約が加わった。国家間の移動を制限され、海外からの観光客は大幅に減少。インバウンド旅行者を見越した観光戦略を促進してきた政府・自治体には大きな痛手となった。一方国内においても、特に昨年 4 月以降、政府による断続的な「緊急事態宣言」が発令された際を中心に、人々の「自粛モード」が広がった。この間、政府による「Go To トラベル」事業や自治体独自の取り組み等の支援策により一時的に観光客が増加する時期が生じたものの、感染者の拡大により無期限で中断され、依然として観光業界全体として観光客・および宿泊客の減少が続いている (①)。

KOKIN が 2016 年より舞鶴で運営する「古民家の宿 宰嘉庵」、そして 2020 年夏より同じく運営する「ゲストハウス 宰嘉庵かなで」も例外ではなく、宿泊客の減少を課題ととらえていた。世界的なクルーズ船も停泊することのある舞鶴港から近いこともあり、感染拡大前には国内外から多くの観光・宿泊客が利用していたが、感染拡大以降、その客室稼働率は感染拡大前と比較して大幅に減少している。

宿泊施設である宰嘉庵・宰嘉庵かなでに興味を持つ人を増やし、訪問・宿泊者が増加することは KOKIN のミッションである「京都一、チャンスのあるまち」の入口、そして舞鶴を好きな人を増やす第一歩となる。そのため、こうした状況下だからこそ、両施設を活用した新たなアイデアが求められていた (②)。ただ、昨年より続く COVID-19 が急速に収束する見込みは薄いため、感染防止策を徹底しつつ、共存しながらプロジェクトを進めていくことが求められていた (③)。

3、プロジェクト目的

こうした背景から、私たちはプロジェクトの目的を「舞鶴地域の活性化を、ビジネスで行う」とした。また、その手段として、KOKINが運営する「宰嘉庵・宰嘉庵かなでの宿泊オプションプランの企画・宣伝・実施」と定め、プロジェクトを開始した。「ビジネスで行う」ことの背景には、持続可能な状態で舞鶴のまちづくりを行うことがある。大学生が関係するプロジェクトの多くは「一過性のイベント」で終わってしまう。その場合、一時的には人を集めることが可能だが、再現性がなく、また主体者がいなければ、その後の地域の持続可能な賑わいづくりには貢献できない。「私たちのインターンシップ活動期間終了後も活用できる」ことを意識した私たちは、集積性を度外視した単発イベントの開催ではなく、持続可能な運営のための適切な収益を得られる仕組みづくりの観点から本目的に決定した。

4、活動内容

上記の目的実現のため、私たちはプロジェクト開始後の2021年6月—11月にかけて、以下の通り活動した。

- ① 6-7月： 現地の情報収集を通し、実現する企画を探る
- ② 7-8月： 現地調査を行い、企画の方針を立てる
- ③ 8-11月： 現地調査から得た情報をもとに、実現したい企画を考案・リリースする

前提としてインターンシップ開始当初、私たちインターンシップ生全員において舞鶴に関する知識・経験が乏しかった。しかし、政府の緊急事態宣言、それに付随するまん延防止等重点措置の適用のため、①の期間中に現地を自由に訪問することは困難であった。そのため同期間では、現地との連絡において原則ZoomやSlackといったオンラインコミュニケーションツールを活用して行い、またKOKIN受け入れ担当の坂本様を中心に現地から写真・生の情報を届けていただくことで現地理解を深めていった。しかし、現地を実際に訪問していないことで企画イメージを行うことが困難であり、アイデアや具体的方針・活動スケジュールにおいて「仮」のものが多かった。

そのため、状況としては依然厳しい部分もあったが、学生側・KOKIN側の予定に余裕がある7、8月に1度ずつ、前者では1泊2日で、後者では5泊6日で、それぞれ現地を訪問させていただいた(②)。

7月の訪問時では、初日に受け入れ担当の坂本様やKOKINの皆様との顔合わせ・方針に関する話し合いの場を設けていただいた後、「神崎海水浴場」や「若の湯」などといった現地の「魅力」訪問をさせていただいた。また2日目に東舞鶴の観光地である「舞鶴赤れんがパーク」やKOKINとも関わりのある「ふるるファーム」を視察させていただくことで、西舞鶴

と東舞鶴の違いを理解し、他の観光地の企画に触れる機会となった。

この現地滞在では、プロジェクトにおける内容面だけではなく、寝食を共にすることで、これまでオンライン上のコミュニケーションが主であったインターンシップ生同士の関係も近くなり、チームビルディングも併せて行うことができた。ここでコミュニケーションを密に取れたことは、その後の企画実施に向けての打ち合わせ等で大きな効力を発揮した。そして本フィールドワーク終了後、今回のチームとしての企画内容に関して、紆余曲折を経て、歴史ある地域資源を生かした「謎解きゲーム」として宰嘉庵宿泊者向けのオプションツアーを実施することに決定した。

一方、8月の訪問時では、本格的に企画の詳細を詰めることを主眼に行った。地域で活動する他の大学生にアドバイスをいただく、地域の歴史資料館に足を運ぶ、地域の図書館で歴史資料を複写するなどの情報収集・意見交換を行いつつ、昼夜問わず学生間で議論を重ねた。その結果、フィールドワーク最終日にはこの謎解きゲームのテーマを現地に縁のある舞鶴城元城主：細川幽斎とすること、および魅力ある舞鶴のまちあるきを楽しんでいただくイベントとすることを決定した。また、企画のタイトルを「歩こう西舞鶴—幽斎と九つの謎—」とし、企画内容やそれに基づく「クイズ」の大枠についての話し合いを行うことで、実現への道筋を描くことができた。

フィールドワーク終了後、企画の詳細の決定を急ぐとともに、広報活動にも力を入れた(③)。具体的には、企画の詳細決定においては京都市内で開催する脱出ゲームへの参加を通じたインターンシップ生間における共通イメージの統一、および他地域における脱出ゲーム・関連イベントの内容や費用面などを総括的にリサーチし、また広報活動においてはKOKINのInstagramへの定期投稿や地域放送局「FM まいづる」番組内での告知などを通し、広く私たちの活動を知ってもらうことを意識した。顧客ターゲットとしては当初京都府外の方々も対象にしていたが、昨今の情勢も踏まえて舞鶴市内を中心とする京都府民に変更する等、情勢の変化に合わせて臨機応変に対応した。また、イベントを持続可能なものとするため、可能な限り多忙なKOKINの皆様には負担を与えないよう、ゲーム冒頭・終了時にストーリーを体現する動画を作成するなど、工夫を凝らした。

以上のような過程を経て、予定していた11月3日(水・祝)より私たちの企画を開始し、初日から1名のお客様に楽しんでいただくことができた。この企画は今後、まずは11月の土・日・祝日の宿泊プランとして発売しており、多くの参加者を見込んでいる。

5. プロジェクト成果

上述の通り、私たちのプロジェクトにおいては本報告書の執筆時点で企画開始日から浅いため、お客様の類型といった面での成果は1名である。しかし、広報に用いたKOKINの公式Instagramのフォロワーは広報開始前と比較して51名増加し、西舞鶴のまちに、そしてKOKINの活動に興味を持っていただく人を増やせたことは一定の成果であると考えられる。また

本来の趣旨とはやや異なるが、受け入れ担当者である坂本様からは、私たちの取り組みから新たなアイデアに触れることができたとのお声を頂いている。



6, プロジェクトを通して学んだこと

私たちが本プロジェクトを行う中で学んだことは多岐にわたるが、特に以下の二点を学んだ。第一に、「好きなこと、得意なことを活かして仕事をすると楽しい」ということである。私たちインターンシップ生は偶然にも、大学・学部・個人の関心ごとやそれぞれの個性・得意分野が異なっていた。そのため、会議ではアイデアマンやまとめ役、参謀に副リーダーとして、また、企画の実施においても事務的な作業やデザイン、動画編集やスケジューラーとして、それぞれの長所を生かした共同作業を行うことができた。また、受け入れ担当の坂本様をはじめ、KOKIN や関わりのあった舞鶴の皆様は全員、「仕事を楽しんで」おられるように見えた。もちろんその裏側には大変なことも多いだろうが、このプロジェクトを通して「働く」ことの楽しさを見出すことができた。第二に、一生懸命になるほど、同じ力を注ぎ続けるのは難しいということである。メンバーは誰一人として、このプロジェクトに本気でない人はいなかった。しかし全員が高い熱量で継続して、かつオンラインを中心にプロジェクトを進行していたため、メンバーそれぞれに疲弊してしまっていた時期があったことも事実である。オンラインのコミュニケーションであるからこそ、一見大丈夫そうに思えたとしてもメンバーを気にかけて、必要に応じてメンバーを頼ることの重要性を学んだ。

7, 反省

本プロジェクト企画・実施にあたり、もちろん COVID-19 の感染拡大などの外的要因に大きく影響されたことは事実であるが、改めて振り返りを行った際、インターンシップ生自身

にも改善すべき余地が多く露呈した。第一に、リモートでのフィードバックの重要性である。特にプロジェクト当初については、まとまっていない段階で多忙な坂本様はじめ KOKIN の皆様のお時間を頂戴することを遠慮し、フィードバックを頂く機会を取れずにいた。しかし、プロジェクト進行時にはいわゆる PDCA (Plan-Do- Check-Action) サイクルを多く回すことが重要であることを改めて現地滞在時に学ぶことができた。ミーティングを開くという事前の日程調整が必要なほどでない際には Slack を用いたチャットでのフィードバックを頂くといった発想に至らなかった点を反省している。第二に、複数のプランの提案・進行を行うことである。今回の COVID-19 のように、プロジェクト進行時には予期しないトラブルが生じることも多い。そこでスケジュールや企画内容の代替案をいくつか準備できていればよいが、今回のプランでは当初からそれを準備できておらず、後半に適宜軌道修正を行うものとなり、焦りを伴った。余裕あるプロジェクト進行を心掛けたい。第三に、スケジュール管理の重要性である。特に後半は大学の講義開始も重なり、インターンシップ生のスケジュール管理が曖昧になっていた面も大きい。SNS 投稿やミーティング進行などその影響は多岐にわたるため、改めて他の活動との兼ね合いや事前にスケジュール設定を行うことの重要性を学んだ。

上記三点を、今後プロジェクト進行を行う際には活かしていきたい。

8, 謝辞

今回のプロジェクトはインターンシップ生だけで作り上げたものではなく、受け入れ担当の KOKIN 坂本様をはじめ、コーディネーターとして陰で支えてくださった坂本先生、本プロジェクトを申請してくださった KOKIN 大滝様、適宜現場のアドバイスをいただいた KOKIN 林様など、地域内外の多くの方々の協力により実現されたものである。また、大学コンソーシアム京都の皆様にも、現地調査時の PCR 検査や視察時の交通費など、インターンシップ生が活動しやすい環境を整えていただいた。お世話になった皆様に改めて感謝を申し上げます。